

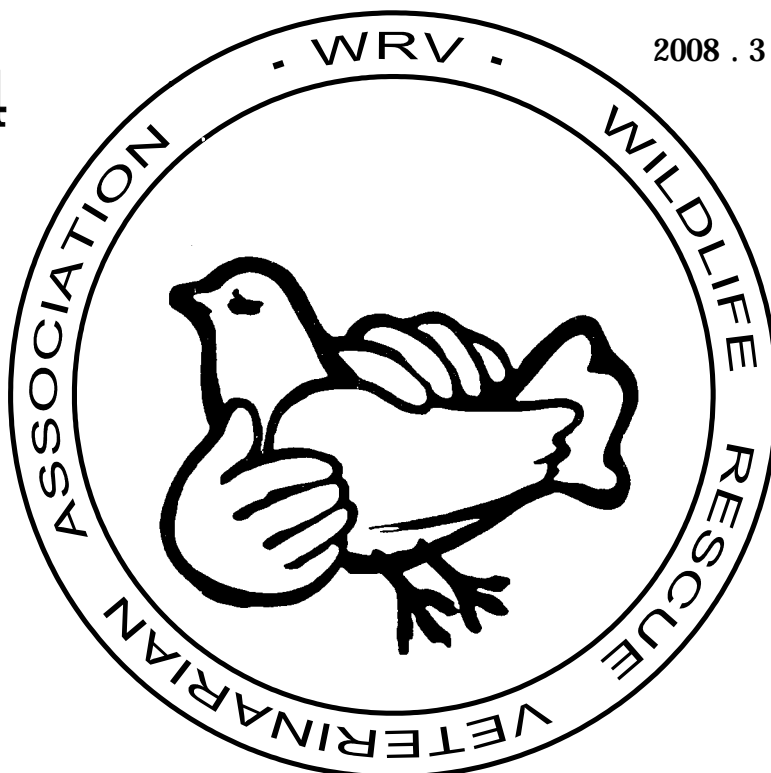
WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.64

2008.3.26 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.64 目次

故 森田 斌 会長訃報	2
新会長就任挨拶	3
韓国・野生動物医学会 冬の学校に参加して	3 - 4
韓国黄海タンカー事故における野生鳥類救護活動報告	5 - 8
平成 19 年度油等汚染対策水鳥救護研修 報告	9
平成 19 年度第 4 回油等汚染水鳥救護研修 報告	10
平成 19 年度油等汚染対策推進研修会 報告	10
平成 20 年度総会報告(収支報告・収支予算・役員改選)	11
事務局より寄付のお礼とお願い	12
事務局日誌	12

故 森田 斌 先生 ご略歴

WRV 理事 須田沖夫

東京都国分寺市・ダクバリ国立病院の院長で、特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会 会長の森田 斌先生が、2007年(平成19年)12月13日に逝去されました。

故 森田 斌先生は、1941年(昭和16年)1月、東京市大森区で出生。1965年に北海道大学獣医学科を卒業し、日本モンキーセンターでサル類の研究に携わられた。その後、大学の先輩である加藤 元先生のダクバリ病院で小動物臨床を研修し、東京都国分寺市にダクバリ国立病院を開業し、現在に至る。一時期、「ダクバリグループ」の会長を務められた。

その間、セキセイインコの国立ウィルス病を発見された。また(社)日本動物病院福祉協会(JAHA)では、1993年4月より1995年7月まで、CAPP(人と動物との絆)ニュースレターの編集委員長を務められ、老人施設や学校等へ、動物を連れての訪問活動の普及に活躍し、JAHAの社会認知に貢献した。北海道に事務局を置いている野生動物救護研究会では、創設時よりの会員で、北海道大学の出身やライフル競技仲間も道内に多く、特にエコ・ネットの小川さんや盛田徹、森田正治、黒沢信道、斎藤慶輔ら、救護研の主要メンバーと親しかった。更に、北海道獣医師会の金川前会長とも親しく交流していたので、救護研の監事も長く歴任していた。

2003年より日本小動物獣医師会の野生動物対策委員を務め、野生動物の救護に関する教本の作成等を担当された。

1991年4月に発足した野生動物救護獣医師協会の創立メンバーとして、その間16年間にわたり、監事、理事、副会長、そして会長を歴任した。特に初期の役員は野口会長はじめ、佐々木、野村、植松、長屋、小松、須田、馬場、らの個性豊かな先生が多く、とりまとめ役として本協会を常にリードしておられた。東京都内の小動物開業獣医師の集まりであるWRVを全国的に展開させ、会員も広く集め、社会へのアピールに努めた。特に1993年2月の北海道苫小牧沖貨物船座礁事故による油汚染鳥救護活動と、1997年1月の島根県沖のナホトカ号重油流出事故におけるウトナイ湖のリハビリセンターの設置など、WRVの油汚染鳥救護の専門家としての地位の確立に努めた。それが環境省の水鳥救護研修センターの設立とWRVへの業務委託につながり、今日のWRV活動の基礎になった。

会長としての最後の指示は、2007年12月に発生した韓国におけるタンカー事故による油汚染事故に対して、「準備をするように」というメールによる発信であった。これを受け、馬場、野村が現地へ赴き、指導や交流をした。その後、この活動を環境省も支援している。

学生時代から現在に至るまで、40年以上にわたりライフル競技の選手として活躍され、毎年、北海道の大会で上位にランクされている。野山を歩くのも大好きであった。また、お酒が大好きで、飲み友達も多く、多くの知人から人生の師として慕われていた。

著書には、『犬の言いぶん - 犬と考える正しいつきあい方 - 』(講談社)等がある。



合掌

会長就任にあたって

NPO-WRV

野生動物救護獣医師協会

会長 新妻 勲夫



この度、第4代野生動物救護獣医師協会会長に就任いたしました新妻勲夫でございます。会員の皆様はじめ多くの方々のご支援に心より感謝申し上げます。これから、故森田斌先生のご意思を受け継ぎ、全力で会務に取り組む所存でございます。

野生動物救護獣医師協会発足以来、本会を支えてこられた初代会長故野口泰道先生、第2代会長須田沖夫先生、第3代会長故森田 斌先生、役員、会員各位並びに、諸先生より、常に変わらぬご指導とご協力があったればこそ無事に会務を運営出来てきたものと誠に有り難く思います。

とりわけ、本会の足跡を記すニュースレターの編集につきましては、皆様方より貴重な原稿を賜り、厚く御礼申し上げます。また、ニュースレター発刊にあたり、会員各位のご理解とご協力によるものと、心から感謝を申し上げます。

発足当時は、東京都で野生動物臨床に携わっている人達にとって、野生動物臨床の変貌に対応すべくお互いに研修の機会を暗中模索していた頃と思われま。

そして、野生動物救護の研鑽の場として、平成3年4月に創立総会のもとに、野生動物救護獣医師協会が設立され、産声をあげました。以来、17年の歩みの中で、本会発展のために尽力された役員、有志の方々並びに会員の皆様方の、日々のご尽力が本会の歴史と伝統の創造となり、多くの講習会ならびに実習、油汚染鳥の救護のための現地での支援等の実績となって継承されております。

本会は獣医学科を卒業し、臨床家としての道を進んだ先生方が野生動物救護の臨床家を目指しているの方々に対する実技の向上を目的とした教育と情報交換そして、懇親の場として設立されたものです。その考え方やそのための実践は諸先輩方の歴史の中で培われたものであり、時代の変化に追随すべく自然環境教育および野生動物救護専門養成の一環として今日に至っております。

WRVにおきましても、故森田斌会長の提唱されておられるようにボランティア会員をはじめ、新会員の入会の促進と皆様の協力も得て、大いに会員相互の交流および海外との交流を行い、最新情報を常に把握し、野生動物臨床獣医師としての研鑽の場、そして技術の向上の場としての役割の担って行きたいと思っております。

世論では、野鳥からの鳥インフルエンザの感染症の問題が未だ解決には至っておりません。また、希少種動物、野生動物、爬虫類の輸出入のマイクロチップの導入、テレメの導入についても国内においては遅延しているのが現状です。そこで、常に会員一人ひとりが最新情報に目を向けて適切な対応が出来るように野生動物救護専門家として、獣医界の中で中核的存在としての実績を作り、多くの有能な人材を送り出し、多方面に亘りご活躍頂き、国際社会の発展に多大な貢献が出来ますよう念願する次第であります。関係各位のご功績を偲びつつ、この17年の伝統と歴史を引き継ぎ、心からの敬意と感謝を申し上げます。

今後とも、会員皆様方の絶大なるご支援をお願いしてご挨拶と致します。

韓国・野生動物医学 冬の学校に参加して

WRV 理事 須田沖夫

2008年2月1日～3日、韓国の非武装地帯の鉄原にある野生動物救護センターの付属リハビリ施設で第1回 野生動物医学冬の学校が開催された。

1月31日 8:20 羽田より馬場、須田がソウルに向かった。ソウル空港にはKFEM 韓国環境運動連合のキム議長が車で出迎えにきてくれた。キム議長とは、昨年12月原油流出事故の時、WRVの馬場、野村がお世話になった人です。キム議長は韓国での野生動物保護、救護の中心的な獣医師の一人で、今回第1回の「冬の学校」の主催である。冬の学校は獣医学生と開業医対象で講義は各方面の第一人者が受け持っている。

ソウル市内から車で3時間ほどの野生動物救護センターに行き、施設の見学や、セミナーの打合せとして1日目の油汚染鳥の救護・洗浄の他、2日目の身体一般検査も二人でやって欲しいと頼まれました。

センターには、カモ・ガンの他タンチョウヅル、マナヅル、フクロウそしてモンゴルクロハゲワシが6羽も

収容されていた。タヌキも2頭おり、狂犬病の検疫をしていた。

診察室は遠心機、レントゲン、麻酔器、輸液セットなど、日本のセンターより充実していた。通路の反対側は1坪くらいの個室になっており、クロハゲワシ、チョウゲンボウ、フクロウそしてヤマネコが入院し、扉にはそれぞれ写真付きのカルテが張ってある。

ヤマネコを通路に出してくれたが、動き回るので写真が撮れなかった。また、通路の両端10mに止まり木をおき、タカの飛行訓練もしていた。夜になり、宿舎に行くために2台の車でセンターを出発したが、2km位走った地点でシカが交通事故にあい、道路の中央に倒れていたのので、キム先生がシカの手足を押さえ、センター長が布袋に入れ、一旦センターに戻ることにした。すぐに抗生剤、全身麻酔薬等を注射し、身体検査をする。尾が無く肛門も見えなかった。若いメスのシカであった。頭部も挫傷している。患部を消毒、洗浄し皮膚縫合をする前に、馬場が肛門を見つけ、チューブを差し込んだ。はじめに丸針を使用しており、縫合が大変であったが、須田が角針を馬場に渡してからは、順調に作業が進んだ。ケージには保温マットを入れ、シカが動き出したので、みんなで宿舎に向かい、遅い夕食となった。



シカの皮膚縫合

民宿は食事なしでダイニングがついており、床暖房である。

2日目の朝、ガンの鳴き声があるので畑の中に行くが、見えなかった。モンゴルクロワシが1羽飛んでおり、その先の土手には40~50羽休んでいた。カササギが騒がしく、繁殖行動がみられた。

キム議長の車で少し行くと、畑にガンが数百羽やすんでいた。先ほどのクロハゲワシの方に行く、その帰り、国境の川は雪原になっており、その一部に水があり、タンチョウヅルやマナヅルが、各50羽くらい小さく見え、オジロワシも1羽留まっていた。兵隊がおり、写真は撮れなかった。その近くに馬、牛、羊の死体が置いてあり、クロハゲワシのエサ場になっていたが、カラスが占領していた。

冬の学校の会場は、古い学校を改装したもので、管理人家族が住んでおり、20名位泊まれるようになっている。そこに野生動物のリハビリ施設があり、3つの鳥舎にタカ4羽、フクロウ5羽が収容されていた。モンゴルクロハゲワシの放鳥が2羽あり、韓国鳥類保護連合の会長が挨拶後、放鳥した。初めの1羽はうまく飛んでいったが、もう1羽は100m位先の林に降りてしまったが、10分後無事に飛び上がった。冬の学校の初日午後、WRVの2名は油汚染鳥の救護と洗浄を受け持った。夕方近く、齋藤慶輔が来たので紹介された。

2月2日、朝食後、学校が始まる前に、クロハゲワシが保護されたとの連絡があり、保護センター所長らと日本人3人が2台の車で収容に向かう。1km先に軍の検問所があり、通行証をみせて通過する。さらに数kmおきに検問所があり、そのつど通行証をチェックされた。国境の非武装地帯の緊張感を感じた。

道路に、数人の人が待っていたので、その辺りをみるとクロハゲワシが畑におり、カラスが周りを囲んでいた。しかし、その個体ではなく軍の施設で保護されていた。クロハゲワシは反応がなく、触ると冷たく虚脱状態であった。保護センターに戻り、皮下補液を400ccして、ビニール袋に湯を入れ、湯タンポにしてタオルを掛け、温風器を当てて保温につとめた。その間クロハゲワシは、黄色の泡を何回も嘔吐した。静脈が見えるが、圧が下がって採血には0.5cc位がやっとであった。(その血液は冬の学校に戻ってからPCVを測定したが、37%であった。)



保護したクロハゲワシ

骨髄内の補液を試みるが、骨がかたく、入れるまでに大変であったが、毎年、オオワシやオジロワシの治療をしている齋藤先生は、慣れた手つきで骨髄内補液を始めた。1時間位して、頭を持ち上げて反応を示すが、まだ立てない。しかし、馬場と須田は帰国の時間が近づいていたので冬の学校に戻った。

冬の学校では、羽根のつなぎ方と、骨髄輸液の方法とカモの死体を使って練習していた。ガンが5羽収容されてきたので、リハビリ施設に放していた。メスシカの死体も運ばれてきた。

昼食後、学生の手でソウル空港まで2時間半位で送っていただいた。いろいろな体験ができ、忙しくも充実した韓国の3日間であった。

今後も日本と韓国の野生動物救護活動に交流が深まれば、両国にとって良い効果をもたらすものと思われる。韓国の関係者の皆様には大変お世話になりました。感謝しております。

韓国黄海タンカー事故における野生鳥類救護活動報告

平成19年12月7日（金）、韓国忠清南道泰安郡(충청남도·태안군)沖の黄海で、香港籍の大型タンカー「ハベイ・スピリット号（約14万6000ト）」と、韓国籍サムスン（三星）重工業のクレーン船（1万2000ト）が衝突し、タンカーの船腹に穴が開き原油が流出した。

（原油積載量約180万バレル、流出6万6千バレル）

事故当初1万5000リットルの原油が流出し、韓国最大のタンカー事故と報じられた。12月20日になり、事故の全容が明らかになる中、流出した原油の量は1万2547リットルであると修正された。

NPO野生動物救護獣医師協会（以下、WRV）は、事故発生 の情報を入手後直ちに、油汚染事故担当の馬場国敏理事（獣医師）を中心に、情報収集を開始した。

韓国から直接情報を入手できるWRV会員の齋藤聡獣医師、齋藤慶輔獣医師らの協力のもと、「湿地と鳥たちの友人」、「KFEM（韓国環境運動連合）」と交流をもつことができ、日本の野生動物救護団体として、現地での救護活動に参加した。

【救護活動】

12月20日（木）

馬場国敏副会長（獣医師）と野村治理事（獣医師）は、成田空国(11:10発)から韓国釜山に向けて出発し、「湿地と鳥たちの友人」のキム・ヨンサン会長（校長）と会い、今後の打合せを行った。

平成19年12月20日撮影
《左から、キム校長、野村獣医師、馬場獣医師、現地団体メンバー》



12月21日（金）

釜山より、KFEM（韓国環境運動連合）と合流するため、列車でソウル に向かう。

KFEMのキム・シンファン共同議長（獣医師、大学で野生動物を研究）と会う。ソウルから南西に約150 kmの泰安近くの万里浦海水浴場には、原油が 15 km にわたって海岸線を汚染している。

キム獣医師らと泰安に行き、そこで動物病院を開業しているDr.キムの病院へ行く。

そこには、オオハム、カンムリカイツブリ、ウ、アイサ(アキサ)など7羽の油汚染鳥がダンボールに収容されていた。

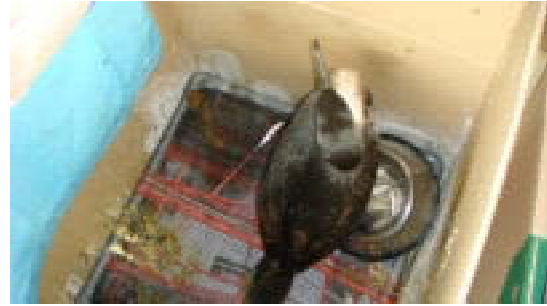
みな衰弱しており、撥水性も悪く、長く水に浮かすと沈んでしまう状態であったとのこと。また、室内の温度管理も悪く、強制補液や給餌を十分に行っていない様子であった。さらに、体重や体温の測定も不十分であり、血液検査などによる健康管理がされていなかった。



平成19年12月21日撮影
《キム獣医師の動物病院》



平成19年12月21日撮影
《保護されたウミウ》



平成19年12月21日撮影
《保護されたカイツブリ》

この他プールのある救護施設には、汚染されたカモメ類が13羽保護収容されており、2日後に12羽が放鳥された。



平成19年12月21日撮影
《保護されたカンムリカイツブリ》



《救護センター入り口》



《保護されりハビリ中のカモメ》



《保護されたカモメの身体検査をする馬場獣医師》

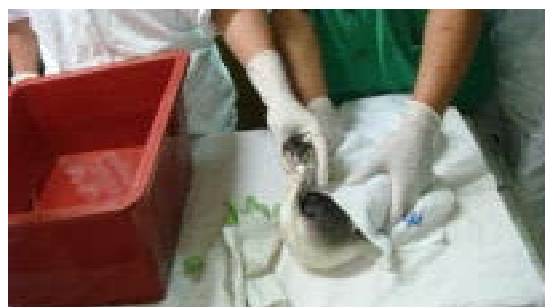
ソウルの動物愛護団体も近くにテントを張り保護活動をしているが、油汚染鳥はほとんど収容されず、収容された鳥も亡くなったとのこと。

日本からWRVが救護活動のために現地入りしたことにマスコミの取材があり、新聞でも掲載された。

12月22日(土)

キム動物病院収容の油汚染鳥7羽の内、2羽が死亡した。

馬場獣医師は、再度2羽の洗浄を行い、強制給餌を行った。



《オオハムに栄養剤を入れる》



《洗浄前の準備》



《オオハムの頭部を歯ブラシで洗う馬場獣医師》



《口に注意をしながらの洗浄》



《肛門部分を念入りに洗浄する馬場獣医師》

海岸を見ると、ほとんど油は無く、油汚染鳥の発見・収容は無い。

多くのボランティアによって、海岸清掃が行われていた。(作業着の色などでグループが分かっている様子)

WRVが委託を受けている、環境省(地球環境局)の横須賀研修会でも、同様の海岸清掃実習が取り入れられているが、大変な作業である。



《海岸清掃をするボランティア》

収容されている5羽の内、3羽が死亡した。新たな収容は無く、保護数も少ないので二次派遣は行わないことを決定し、野村獣医師は23日帰国することとした。

日本でも救護活動の際に必ず障害となるのは“活動資金”であるが、WRVは引き続き救護活動を行うKFEMに義援金を贈った。



平成19年12月22日撮影
《左より、野村獣医師、馬場獣医師、キム共同議長、キム獣医師》

12月24日(月)

収容されている2羽は、少し体重も増加し、自分で餌を食べるようになった。状態によって

は、数日後に放鳥が可能なのではないかと考える。

馬場獣医師は、現地救護関係者と共に、マスコミ対応として簡単なレクチャーと洗浄を行った。今後多数の保護収容が無ければ、WRVの現地での救護活動を今週中に終了し、馬場獣医師は帰国する（12月27日予定）。

テレビ放映では油汚染鳥の死亡個体が見られるが、いつのものか不明である。

最も心配された海鳥の越冬地は、油汚染地域と反対側の湾のため、今回は鳥に被害が少なかった。さらに油汚染地域は船舶と人の出入りが多いので、鳥が逃げたとの話も聞く。



《状態が安定してきたカンムリカイツブリ》



《元気に泳ぐカンムリカイツブリ》

12月25日（火）

関係者と打合せ（馬場獣医師）。29日には、2羽が放鳥できるのではないかと。

12月26日（水）

釜山で関係者にセミナー（馬場獣医師）

12月27日（木）

馬場獣医師が日本に帰国

12月29日（水）

カンムリカイツブリ等放鳥（指示）

【今回の成果】

WRVをはじめ、日本の野生動物救護団体と韓国の救護団体と交流がもてた。

韓国の野生動物救護への考え方や技術・知識に個人差が大きく、まだ組織化されていない。今回油汚染鳥の救護について、診断、治療、管理、洗浄法など少し指導ができた。

なお参考資料とし、WRV主催の油講習会で使用している教本ならびに洗浄法DVDを寄贈した。

日本（WRV）の油汚染鳥救護の知識と技術は、韓国の救護活動や体制作りにも協力することができると考えられる。また韓国の団体もそれを希望している。

大量の原油流出事故ではあったが、油防除対応の成果もあり、野生動物への被害は、越冬地が離れていたこともあり少なかったと考える。

これは、海流等の影響で数週間後に予測された、日本への油漂流の被害も無いものと考えられる。

平成20年2月1-3日に韓国で、野生動物シンポジウムが開催されるが（既に決定していた）急遽WRVから馬場獣医師と野村獣医師らの参加要請があった。

極東から東南アジア各国との油流出事故における野生動物救護活動の共通認識と、知識・技術の向上のため、今後定期的な交流が必要であると考えられる。

国レベルでの協力体制の一部に、野生動物救護を加える必要がある。

<平成 19 年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修 報告>

WRV事務局 吉見裕子

平成 19 年 10 月 25 日(木)、26 日(金)に第 1 回、12 月 6 日(木)、7 日(金)に第 2 回、平成 20 年 2 月 4 日(月)、5 日(火)に第 3 回油等汚染事故対策水鳥救護研修(環境省)が環境省水鳥救護研修センター(日野市)にて開催され、平成 20 年 1 月 21 日(月)には福島県福島市(会場:福島テルサ)において現地研修が開催されました。

研修会には北海道から沖縄まで、全国から参加者が集まりました。また、現地研修においては、福島県庁、茨城県庁のご後援をいただき、関東・東北地方からの参加者が集まりました。

油等汚染事故対策水鳥救護研修では、水鳥救護の体制作り、水鳥の救護以外にも背景にある油汚染事故の基礎知識を学ぶことができます。全ての研修会において、参加者は熱心に各講義を受講されており、実習にも積極的に取り組んでおられました。また、質疑応答においては、講義を通して感じた疑問点などが挙げられ、大変有意義な時間となりました。

また、参加者は、鳥獣保護行政担当者、動物園関係者、獣医師、リハビリテーター等、水鳥救護に関わるさまざまな役職の方々であり、交流会では、各々の立場で感じることなど、講師も参加者も時間が惜しまれるほどご歓談され、貴重な時間を過ごされたことと思います。

この研修に参加された皆様が、地元情報を持ち帰り、有事の際には、スムーズな救護活動ができることを願っております。

最後に、本研修会を開催するにあたり多大なご協力をいただいた、独立行政法人海上災害防止センター、(財)日本野鳥の会、JEDIC をはじめとする皆様方に深く感謝申し上げます。



< 講義の様子 >



< 中津先生と参加者の皆さん >



< 洗浄実習 >



< 交流会(水鳥救護研修センターにて) >



< 現地研修の様子 >

<平成 19 年度 第 4 回 WRV 油等汚染水鳥救護研修 報告>

WRV事務局 吉見裕子

平成 20 年 1 月 20 日(日)福島県福島市(会場:福島テルサ)にて平成 19 年度第 4 回 WRV 油等汚染水鳥救護研修が開催されました。講義だけでなく、講義中にビデオ上映や模型を使った水鳥洗浄の説明・デモンストレーションを取り入れるなど、参加者が楽しく、より理解し易いように各講師が工夫を凝らした研修会となりました。また、研修中は、参加者が熱心にメモを取り、講義に聞き入る様子が見られました。

半日という短い日程での研修でしたが、この研修を機に、参加者それぞれが油等汚染事故による水鳥救護についてより興味を持ち、理解を深めていただければ幸いです。



<挨拶:WRV 会長 新妻勲夫先生>



<模型を使ったデモ:馬場國敏先生>

<平成 19 年度 油等汚染対策推進研修会 報告>

WRV事務局 梶山あき

平成 20 年 2 月 25 日(月)、26 日(火)に、平成 19 年度油等汚染対策推進研修会(環境省)が開催されました。昨年まで、独立行政法人海上災害防止センター防災訓練所(横須賀市)で 3 日間にわたって行っていた研修を、今年度は会場を環境省水鳥救護研修センター(日野市)に移し、研修日程を 2 日に短縮して行いました。

研修会では油に関する基礎知識、対応法と共に、油汚染による野生動物への影響に関する講義がなされ、また、研修 1 日目には独立行政法人海上災害防止センターの小倉氏、WRV 理事の野村氏による油の性質を学べるような簡単な実験・デモンストレーション、2 日目には WRV 講師による油汚染鳥の洗浄実習が行われました。



<油の性質実験:海防災 小倉氏>

研修終了後回収したアンケート調査によると、講義については「勉強になった」「参考になった」、実習に

ついては「水鳥の洗浄の大変さがよくわかった」といった感想が寄せられました。また、研修後の今後の取り組みとして「他の部署やボランティアとの連携、連絡体制を考えたい」というご意見が多数あり、研修会の成果を感じることができました。参加者の皆様方が、この研修会を機に油汚染事故発生時には、各部署との連絡体制を活用し、よりスムーズな対応ができることを願っています。

最後に、本研修会を開催するにあたり多大なご協力をいただいた、独立行政法人海上災害防止センターをはじめ、関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成 20 年度総会報告(収支報告、新役員補充結果)

平成 20 年 3 月 1 日(土)平成 20 年度総会が立川市民会館にて開催され、全ての審議案件について承認されました。以下に、平成 19 年度収支報告・平成 20 年度収支予算及び新役員補充の結果をご報告いたします。

会計報告

平成 19 年度収支報告書(平成 19 年 1 月 1 日から平成 19 年 12 月 31 日まで。単位:円)

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	2,212,000	事業費	
事業収入	164,000	傷病野生動物の救護と野生復帰	532,166
委託事業収入	13,353,447	病性鑑定及び疫学調査	156,429
補助金収入	0	学会報告、会報、講習会、HP 等	11,639,175
寄付金収入	691,931	野生動物の傷病予防に関すること	12,080
預金利息	16,152	生物多様性の保全に関すること	0
雑収入	0	野生動物の救護施設に関する事業	0
収益事業会計繰入金	39,222	他団体との交流	223,971
		管理費	2,131,110
		租税公課(消費税)	322,300
当期合計金額	16,476,752	当期合計金額	15,017,231
前期繰越収支差額	24,300,902	当期収支差額	1,459,521
		法人税等充当金	636,900
		次期繰越収支差額	25,123,523

平成 20 年度収支報告書(平成 20 年 1 月 1 日から平成 20 年 12 月 31 日まで。単位:円)

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	2,500,000	事業費	
事業収入	300,000	傷病野生動物の救護と野生復帰	1,700,000
委託事業収入	13,000,000	病性鑑定及び疫学調査	230,000
補助金収入	1,000,000	学会報告、会報、講習会、HP 等	11,550,000
寄付金収入	500,000	野生動物の傷病予防に関すること	100,000
預金利息	0	生物多様性の保全に関すること	100,000
雑収入	0	野生動物の救護施設に関する事業	50,000
収益事業会計繰入金	100,000	他団体との交流	200,000
		管理費	2,000,000
		租税公課(消費税)	300,000
当期合計金額	17,400,000	当期合計金額	16,230,000
前期繰越収支差額	25,123,000	当期収支差額	1,170,000
		法人税等充当金	500,000
		次期繰越収支差額	25,793,000

新役員補充に関する件

理事 田向 健一(新任)
東京都大田区 田園調布動物病院院長

理事 皆川 康雄(新任)
神奈川県川崎市 野生動物ボランティアセンター所長

事務局より 寄付のお礼とおねがい

寄付ご協力者(敬称略) 2007年12月5日~2008年2月29日

<一般>		<韓国救護活動>	
12.18 山田暁子	13,000	12.14 町田和子	3,000
20 群馬県小動物臨床研究会	20,000	18 山田暁子	8,000
26 白倉豊	5,000	20 万行弘倫	30,000
1.31 ダクダ動物病院国立病院(募金箱)	22,846	<人災募金>	
		1.7 日本野鳥の会オホーツク支部	16,740

【人災による傷病野生鳥獣の救護活動募金】のお願い

WRV では、傷病野生鳥獣救護活動を迅速に実行するため、人員の派遣費および資材の調達の募金活動を行っています。ご協力をお願いいたします。(救護活動用基金)

郵便局加入者番号：00190-5-722368
加入者名義：WRV 人災募金

事務局日誌 2007.12.27~2008.3.26

- - - 12月 - - -

- 21：環境省 ガイドライン提出 対応：須田
26：環境省へ韓国油流出事故の報告 対応：馬場、野村、須田

- - - 1月 - - -

- 7：環境省 韓国油流出事故について韓国知事らへ報告 対応：野村、馬場、新妻、皆川、須田
19：日本野鳥の会 柳生博トークショー 対応：須田
20：第4回WRV油等汚染水鳥救護研修(福島) 対応：馬場、須田
21：平成19年度油等汚染事故対策水鳥救護研修(現地研修) 福島県庁 対応：須田、皆川
24：第1回WRV理事会
28：監査会 対応：小森(監事)、倉林、新妻、野村、佐藤

- - - 2月 - - -

- 1/31~2/2：野生動物セミナー(韓国) 対応：馬場、須田
4,5：平成19年度第3回油等汚染事故対策水鳥救護研修 対応：須田、新妻、大窪、野村、皆川
6,7：対馬シロエリオオハム救護活動 長崎県庁 長崎県獣医師協会 対応：戸田(新妻、須田)
19：第2回WRV理事会
25,26：平成19年度油汚染対策推進研修会 対応：野村、新妻、皆川、須田
25：環境省 久保さんと国土交通省 水鳥救護センター視察

- - - 3月 - - -

- 1：平成20年度WRV総会 立川市民会館
17：平成19年度第2回JEDIC理事会 対応：大窪
20頃：ヒナを拾わないで！キャンペーンポスター納品 対応：野村
21：ヒナを拾わないで！キャンペーン環境省記者クラブにて野鳥の会、鳥類保護連盟と共同プレスリリース 対応：馬場
21：石油連盟セミナー 対応：須田、野村
24：マイクロチップ講習会(広島) 対応：須田
25：第3回WRV理事会

野生動物救護獣医師協会 (ホムページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 64 2008.3.26 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パルビル302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：須田 沖夫